

壁

ドイツをつらぬく国境

現代の歴史展

BUNDESSTIFTUNG
AUFARBEITUNG



Bild

DIE WELT

占領地域

新たな対立
1945年7月、「三巨頭」がポツダムで会談し、連合国それぞれが占領地域の境界が確定した。しかし、英首相ウィンストン・チャーチルと米大統領ハリー・S・トルーマンは、ソ連の独裁者ヨシフ・スターリンを相手に、新しい世界平和の枠組みを勝ち得ることはできなかった。



鉄のカーテン

19 45年7月のポツダム会談で「三巨頭」、すなわち英首相ウィンストン・チャーチル、米大統領ハリー・S・トルーマン、そしてソ連の独裁者ヨシフ・スターリンは、ドイツ帝国敗戦後の領土を共同で管理することについて確認し合った。ドイツはそれぞれの国の占領地域に、そして首都ベルリンも各国の占領地区に分割された。戦勝国は、自らのテリトリーについては独自の責任で管理し、ドイツ全土にかかわる問題については以後、ベルリンに置く管理理事会において共同で決定することとした。しかし、このような危うい同盟が崩れ去るまでには、幾月もかからなかった。英米地域とソ連地域との境界線は、世界観を分ける境界線となったのである。チャーチルは、このことを早くから予感していた。ドイツ降伏の4日後には、チャーチルはトルーマン宛の電報で、ヨーロッパの中央に下りてきた、大陸を分断する「鉄

のカーテン」のイメージについて初めて言及している。事態はとりわけベルリンで先鋭化した。かつての帝国首都は4つの占領地区に分割され、3つの戦勝国にフランスを加えた4カ国が緊密に協力することが必要であった。しかしベルリンでは、4カ国による占領から数カ月も経たないうちに激しい対立が生まれた。この対立は、1946年春になるとますます激しくなっていた。公然と行われる宣伝戦ばかりでなく、その裏では数多くの諜報活動が展開されていた。こうして、戦勝国の協力という夢は早々とついでた。ヨーロッパと世界に平和が訪れることはなく、それどころか東西冷戦の幕が開いた。



協調に失敗 当初、米英仏はドイツを共同で管理しようと考えていた。しかし1946年には早くも、管理理事会における東西の対立は抜き差しならぬものとなっていた。



最初の境界 メドライト村では、小さな川がアメリカ占領地域とソ連占領地域との最初の境界をなした。後にドイツを貫くことになる境界を示すのは、この時はまだ立て札だけであった。



見せかけの協調 ベルリン司令部前に立つ4戦勝国の憲兵。4つの占領地区に分割されたベルリンの町は、3つの西側連合国とソ連が共同で管理していた。

「干しぶどう爆撃機」
 テンペルホーフ空港に接近する米軍輸送機を見上げる西ベルリンの子供たち。3つの西側占領地区は、11カ月にわたって空路による支援を受けた。爆弾ならぬ支援物資を積んだ輸送機は「レースボンバー（干しぶどう爆撃機）」と呼ばれた。



封鎖



分断された町 西ベルリンは、陸路による補給を断られた。物資の持ち込みを阻止するため、東独警察は地区境界で厳しい検問を実施した。ブランデンブルク門もそのひとつであった。



買い出しでしのぐ 飢えに苦しんだ西ベルリン市民は、食糧を求めて郊外に出向き、なけなしの財産をはたいて食べられるものと交換した。しかし、もし摘発されれば、厳しい処罰を覚悟しなければならなかった。



明確な意思表示 1948年9月9日、数十万の西ベルリン市民が旧帝国議会議事堂前に集まり、封鎖に抗議した。

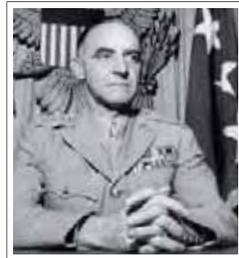
空からの救援

西の民主主義と東の独裁との対照が、ベルリンほどあからさまになったところはほかにない。1946年10月、ベルリン全市で自由選挙が実施された。1932年以後では初めてのことであり、以後、1990年以前ではこれが最後となった。この選挙では伝統的な社会民主党（SPD）と、新しく創設されたキリスト教民主同盟（CDU）への支持が民意として明白に示された。これに対し、ドイツ共産党が社民党の一部を無理やり併合して誕生したドイツ社会主義統一党（SED）の得票は、5分の1にとどまった。続く1947年6月の市長選挙でSPD陣営のエルンスト・ロイターが当選すると、ソ連は承認を拒否した。1年後、西ドイツで新しい通貨としてドイツ・マルクが導入された際、ベルリンにおける通貨問題について、ソ連軍のベルリン司令官は協議に応じようとしなかった。その後、ドイツ・マルクはベルリンの米英仏の西側3地区でも導入された。これに対してスターリ

ンがとった対抗策は、西ドイツからベルリンの西側占領地区に至る陸路・水路をすべて封鎖する、というものであった。周辺地域からベルリンへの電力と食糧の供給も遮断された。ベルリンの周囲と、市内を通る地区境界線には、東独の国境警備隊が検問所を設けた。封鎖中、ベルリンの3つの西側占領地区は周囲から必ずしも完全に切り離されたわけではなく、訪問自体は不可能ではなかったが、物資の持ち込みを東独警察に摘発されれば、厳しい罰が待ち受けていた。しかし、米軍司令官ルシアス・D・クレイは、ソ連の脅しに屈しなかった。彼は、ある英軍将校の大胆な提案をとりあげて、ベルリンの3つの西側地区にただちに物資を空輸することにした。こうして「空の架け橋」が架かり、間もなく、輸送機は分単位で着陸するようになった。1949年5月、氣勢をそがれたソ連は、方針を転換、西ベルリンとの往来が再び可能となった。



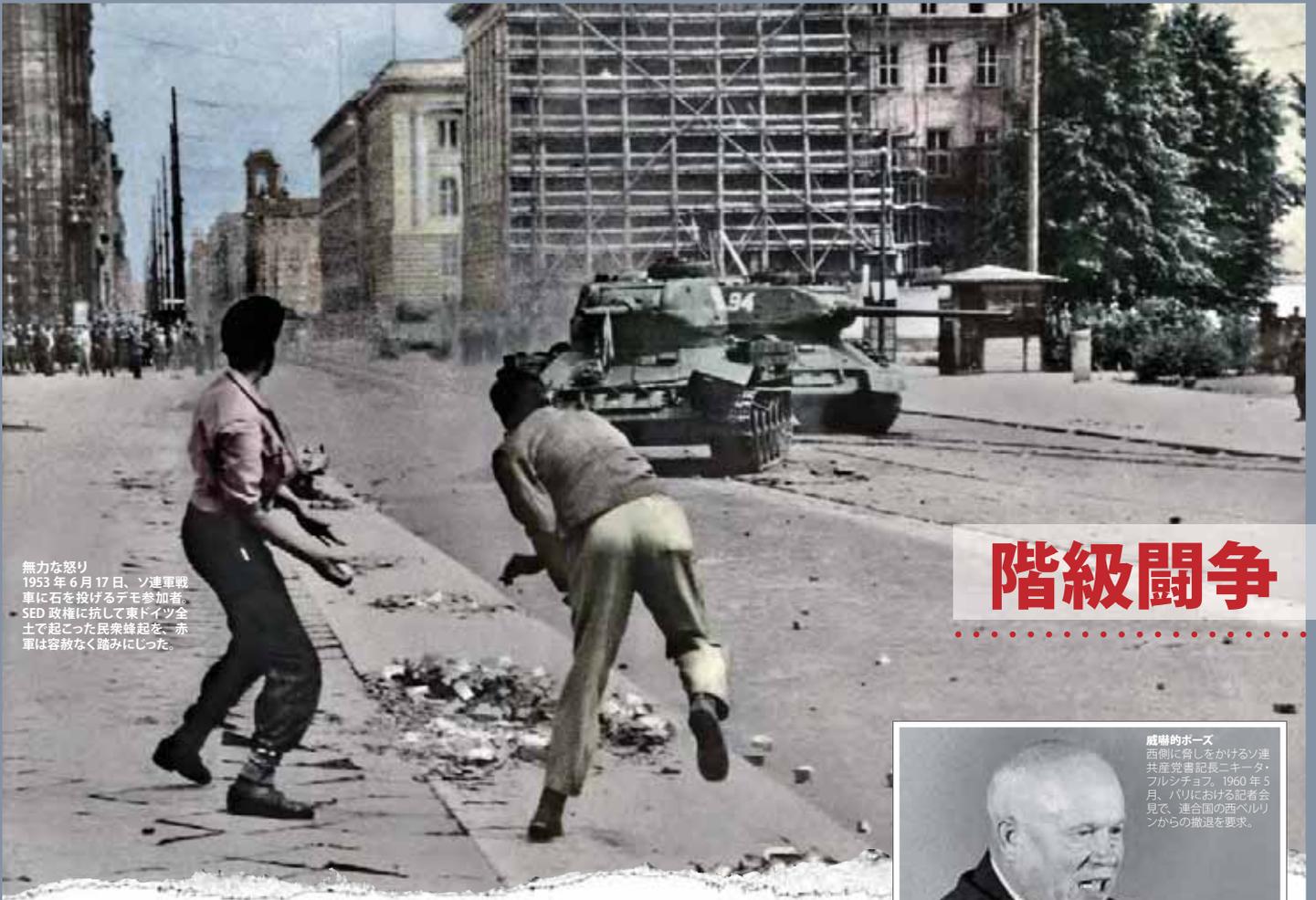
空輸作戦 十分に準備する間もないままに、1948年夏、英米軍は前例のない「空の架け橋」と呼ばれる空輸大作戦を展開し、こうして西ベルリンの「占領国」が、「同盟国」となった。



強靱な意志 米軍司令官ルシアス・D・クレイは、ソ連の圧力に対して一歩も引かなかった。



平和的な勝利 1949年5月、ソ連は封鎖を解き、200万の西ベルリン市民を人質にとることを放棄。冷戦最初の戦いで、西側は勝利した。



無力な怒り
1953年6月17日、ソ連軍戦車に石を投げるデモ参加者。SED 政権に抗して東ドイツ全土で起こった民衆蜂起を、赤軍は容赦なく鎮圧した。

階級闘争



威嚇的ポーズ
西側に脅しをかけるソ連共産党書記長ニキータ・フルシチョフ。1960年5月、パリにおける記者会見で、連合国の西ベルリンからの撤退を要求。

民衆を圧する政治

1952年、ドイツ社会主義統一党 (SED) は社会主義体制の構築について決議した。これに先立ち、SEDはソ連の支援を受けて東独における独裁体制を確立していた。1949年、ドイツは二つの国家に分かれて独立を回復したが、西のドイツ連邦共和国では生活水準が順調に向上する一方、東のドイツ民主共和国では、SEDが自らの国民に対する階級闘争を進めていった。農民は無理やり協同組合に統合させられ、民間事業者はますます高くなる税金に屈伏せざるを得なくなり、キリスト教徒は迫害された。1953年6月、労働ノルマの10%引き上げが規定されると、東ベルリンでは建設労働者が抗議のデモを行った。6月17日、抗議行動は東独全土に広がった。700をこえる町や村で、およそ100万人がデモを繰り広げ、自由選挙の実施と独裁の終焉を訴えた。SEDによる支配は、もはや風前の灯火と見えた。しかしその時、ソ連軍の戦車が出動して、抗議行動を鎮圧した。死者は少なくとも55

人にのぼった。SEDにとって、民衆蜂起は衝撃であった。党指導部はまず、緊張の緩和と物資供給の改善が必要であることを認めた。しかし同時に、国家保安省 (シュタージ) の体制が強化された。1958年、党は再度強硬な態度に出た。第5回党大会では、「社会主義体制の構築」を、再びあらゆる分野で推進することを宣言。その際、SEDの行動は、イデオロギーのキャンペーンにはとどまらなかった。農業の集団化が、強圧的に遂行された。民間事業者、職人、パン屋、肉屋、その他まだ残っていた多くの個人商店は、財産を没収されたり、生活協同組合への加入を強制された。東独のキリスト教徒は、またしても苦難を受けた。農業生産は劇的に落ち込み、物資は逼迫した。60年代初頭、SEDは、東独を改めて危機に陥らせた。



集団化 ノイマルデンベルクのマルクスヴァルデに立てられた看板。農業生産共同組合への参加を呼びかけている。社会主義の名のもとに、自発的な参加をうたっているが、実際のところは厳しい強制であった。



独裁の顔 ベルリンのポツダム広場を進むソ連の戦車。ソ連軍が出動して、抗議行動を鎮圧した。



月並みなスローガン 「社会主義は勝利する」と記した大看板。空虚な約束をにかけて、SEDは人々を社会主義の建設に向けて動員しようとした。しかし、いかに大言壮語しようとも、日常生活は勝利に逆行するものであった。



届かない要求 自由選挙を要求する東ドイツの労働者。SEDにとっては、自らの権力が危機にさらされていることは明白であった。SED 政治局は、ベルリンのソ連軍司令部に逃げ込んだ。



戦間的 1960年5月1日、東ベルリンを進行する国家人民軍。



見せかけだった牧歌的風景 1952年、両ドイツ間の国境は遮断された。鉄条網を挟み、武装した東独の歩哨と西独の連邦国境警備隊 (左) が対峙している。

東独からの脱出

自らの国民を抑圧するSEDの政策により、ドイツ民主共和国(東ドイツ)における生活状況は更に悪化した。その結果、50年代末には、東独を去って西を目指す人々の数が、急増した。彼らが目指したドイツ連邦共和国(西ドイツ)では自由と、民主主義、そして経済の奇跡が脱出者を迎えてくれた。脱出を図ったのはとりわけ、高い教育を受けた若い人々であった。

しかし脱出は、とうに簡単なことではなくなっていた。1952年以降、両ドイツ間の国境は鉄条網で遮断され、厳しく検問されていた。ベルリン全域も、その周囲は東独国境警察によって封鎖網が敷かれ、これに対して東西ベルリン間の境界は、監視されてはいたものの完全に封鎖されてはなかった。ベルリン全体にかかわる問題は連合国4カ国すべてが管轄していたためである。幾つかの鉄道や地下鉄は地区の境界を越えて運行されていた。しかし、大きな荷物を抱えて境界線に近づく、身柄を拘束される危険があった。

それにもかかわらず、西ベルリンのマリーエンフェルデ収容キャンプは、まもなくいっぱいになった。1959年には、脱出者の数はひと月あたりまだおよそ1万2千人であったが、1960年には5割増しになった。1961年夏には、毎日2400人に及ぶ男、女、子供たちが、せいぜいトランクを2,3個抱えただけで、西で新しい生活を始めようとやってきた。政治的難民と認められた者は、西ベルリンに住居を得たか、あるいは飛行機で飛び立って行った。民間の航空網は西側連合国の管轄であったため、飛行機で脱出した「共和国逃亡者」(とSEDは呼んだ)の身柄は安全であった。ソ連共産党書記長ニキータ・フルシチョフとSED書記長ヴァルター・ウルブリヒトは、航空機による西ベルリンへの出入りに検問をかけることを要求した。これが抜け穴を塞ごうとする試みであることは明らかであった。



あてのないままにこの子を自由の中で育てよう。両親は故郷を捨て、財産もほとんど捨て去って、よりよいチャンスの子供に与えようとした。たいていの場合、この決断は報われた。



永遠の別れ? 脱出の動きはとどまることがなかった。西ベルリンのマリーエンフェルデのキャンプに入る一家。



偽り 1961年6月15日の記者会見で、ヴァルター・ウルブリヒトは「壁を築こうとは誰も考えていない」と述べた。しかし脱出する者の数はますます増えていった。



疲れ果てて 脱出に疲れ果ててベンチで休む若い女性。



最後の抜け穴 両ドイツ間の国境が封鎖されていたため、脱出を望む東独国民に残されていたのは西ベルリンだけであった。ここから、飛行機で西独に向かうことができた。



手痛い損失 50年代に東ドイツを去ったのは、とりわけ高い教育を受けた若い人々であった。そのほか、集団化を強制された農民たちも、大量に脱出した。SEDはこの「足による投票」を阻止する必要に迫られた。しかしウルブリヒトや、ホーネッカーや、その同志たちは、改革を試みず、かわりに西ベルリンを封鎖しようとした。

壁の建設



出動
1961年8月13日、平和を守るため、と称してブランデンブルク門を封鎖する民兵組織「労働者階級戦闘団」。この写真を、東独は以後、数十年にわたって「ファシストに対する防壁」を正当化するために使い続けた。



まさかの衝撃 壁の建設は青天の霹靂であった。『ベルリナー・モルゲンポスト』紙は号外で衝撃を伝えた。見出しには「東ベルリン、封鎖される」とある。

1961年8月13日

1961年8月12日から13日にかけての深夜、ついに事は起こった。まず1時5分、明かりが消えた。いつもなら皓々と照らされていたブランデンブルク門、この未解決のドイツ問題の象徴が、生暖かい夏の夜、突然、闇に閉ざされる。古典主義様式のこの門は、ミッテ区とティアガルテン区の境界をなしていた。そこを亡霊のように装甲車が通り抜け、軍服を着た者たちが歩哨に立った。ここだけではなく、ベルリンの3つの西側地区を取り囲む境界線の至るところに、この時刻、武装した東独部隊が出動した。彼らはそれまで使われていたおよそ80の交通路を封鎖し、道路、空き地、公園に鉄条網を張った。東ベルリンと東独の市民が地区境界を越えるには、特別の通行許可証が必要とされた。つまり事実上、通行不能となった。1時45分頃には、西ベルリンの全域が封鎖され、武装した歩哨がこれ

を取り囲んだ。1961年の春から、東から西への脱出の波が東独の存続を危機に陥らせていた。これを根拠に、ヴァルター・ウルブリヒトは、西ベルリンを完全に封鎖するよう、ニキータ・フルシチョフを説得した。SEDの国防担当委員エーリヒ・ホーネッカーは、この「バラ作戦」を完璧に隠し通した。この作戦には膨大な準備が必要であり、何千もの兵士や、警官や、民兵組織「事業所戦闘団」が動員されたにもかかわらず、封鎖に関する詳細は、事前には全く表に出なかった。噂話なら、散発的に西独の通信社が聞きつけていたが、ボンや西ベルリンの政治家たちには、東独が実際に、4カ国体制に公然と逆らってベルリンの地区境界の封鎖に踏み切ることなど、想像できなかった。



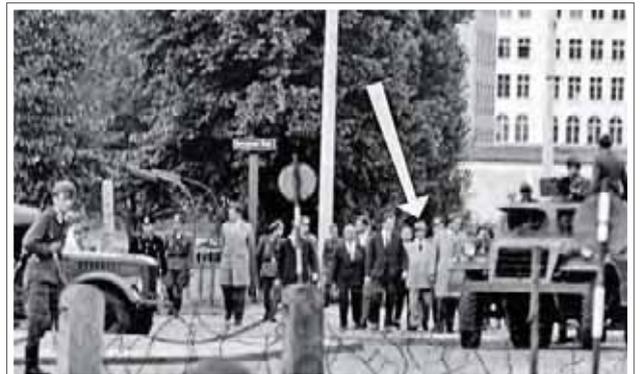
重武装 装甲車を動員して、東独の武装民兵隊はブランデンブルク門の通行を阻止。東独軍の戦車も、見えないところで待機していた。



絶え間ない補強 鉄条網ひと巻きではまだ足りない——封鎖開始から数時間後、障害物を拡充する東独国境警察。



公然たる暴力 東独国境警察は、抗議する西ベルリン市民に銃剣を突きつけて、地区境界まで押し戻した。



SED書記長ヴァルター・ウルブリヒト（矢印）封鎖を視察。西側記者が撮影。

現実的政策



決意を誇示
1961年秋、外国人用の検問所
チェックポイント・チャーリーで、
米軍戦車とその威容を見れば、
東側でソ連の重戦車が対峙。こ
うして、ケネディの特別顧問ル
ン・アス・クレイは、抜け目なく、ソ
連にも壁建設の責任を認めさせ
た。



失望 1961年8月16日、「西側は何もしない」と見出しにかけた「ビルド」紙。これは西ベルリン市民の心を代弁するものであった。人々は保護国に見捨てられたと感じていた。

連合国の対応

壁の建設は、西側にとって全くの不意打ちであった。しかし3つの保護国にとっては、強硬な対抗措置に踏み切る理由はなかった。米大統領ジョン・F・ケネディはマサチューセッツでヨットを繰り、英首相はスコットランドで狩りを楽しみ、仏大統領ド・ゴールはシャンパーニュで休養——彼らはまだ悠然としていた。3人とも、封鎖は政治的現実の単なる追認でしかないと考えていたのである。ケネディは「我々は、今は何もしない。なぜなら、戦争以外に選択肢はないからだ」と言い切った。アメリカが細心の注意を払っていたのは、自らの権利が侵害を受けないことであった。ケネディは、1961年7月25日にはすでに、ニキータ・フルシチョフに対し、西側が何を要求し、何を要求しないかを伝えていた。ケネディにとって譲れないことは、連合軍の西ベルリン駐留、西ベルリンとの自由な通行、そして西ベルリン市民の自決権であった。ケネディはテレビ演説を行ったが、東ベルリンにつ

いては何も触れなかった。しかしドイツ人にとって、封鎖は受け入れがたいことであった。西ベルリン市長ヴィリー・ブランドは、ワシントンに書簡を送り、「何もせずただ受身になっているだけでは、西側諸国に対する信頼を危機に陥れることにもなりかねない」と訴えた。ケネディは、これに応じて副大統領リンドン・B・ジョンソンをベルリンに派遣、ルン・アス・D・クレイを特別顧問に任命し、さらに1500名の兵士を送り込んで西ベルリンの米軍守備隊を強化した。英軍と仏軍も派遣部隊を増強した。戦車を動員して、保護国は存在を誇示した。こうして、またとりわけ1963年6月、ケネディが自らベルリンを訪れ、「私はベルリンの一市民である!」という名高い演説を行って、西ベルリン市民の信頼は回復した。壁の建設によって劇的に変貌したベルリンの状況が公式に規定されたのは、ようやく、1972年の4カ国協定によってであった。



高官の来訪 1961年8月20日、米副大統領リンドン・B・ジョンソンとヴィリー・ブランドが共に姿を見せ、西ベルリン市民に希望を与えた。



嘲笑の身振り 1963年1月7日、ヴァルター・ウルブリヒト(右から2人目)が、ニキータ・フルシチョフ(中央)に、ベルリンの境界遮断機を見せる。ソ連の最高権力者は、西側に向けて冷笑的に手を振った。



私はベルリンの一市民である 1963年6月26日、ヴィリー・ブランドとコンラート・アデナウアーと共に市内を移動するジョン・F・ケネディ。彼の西ベルリン滞在はほんの数時間であったが、この東の間の訪問により、彼は伝説となった。



調印 1972年6月3日、4カ国協定に署名する各国の外務大臣。左からモリス・シューマン(仏)、アレック・ダグラス＝ヒューム(英)、アンドレイ・グルムイコ(ソ連)、ウィリアム・ロジャーズ(米)。

別れ
1961年8月13日、ベルリンのハイデルベルク通りの鉄条網越しに別れを告げる2人の母親とその子供たち。現実の一コマを切り取ったこの写真は、世界を駆けめぐった。



絶望



脱出成功 この若者は、ベルリン北部で鉄条網をくぐり抜けた。頭に軽いけがを負っただけです。西ベルリンの支援者が彼を安全なところへ運んだ。

苦難、そして自由の渴望

壁の建設によって分断されたのは、ベルリンだけではない。家族や友人もそうであった。8月13日から数日の間は、地区境界にもまだ隙があり、数千の東ベルリン市民がこのチャンスをもにした。最初の12時間だけでも30余名の若者が、ラントヴェア運河や、ハイデカンブ掘、ブリッツァー運河を泳いで西に渡った。地区境界沿いの墓地や工場の壁を越えて西ベルリンに入る道も、最初のうちはまだ比較的、危険が少なかった。しかし1961年8月15日以降、市内で、鉄条網に代わってコンクリートやレンガの壁が建設されると、脱出ははるかに困難になった。壁建設に徴用された人々からも、数十名が自由を求めて脱出した。国境警備隊からも多数の脱走者が出た。当初、西ベルリン市民は、身分証明書があれば東ベルリンに入ることができたが、1961年8月23日、SED 政治局はこれを阻止。多くの東ドイツの人達が、偽造した西ベルリンの身分証明書

で国を去ったからである。それから2年半ほどで、人々は東西でほぼ完全に分断されてしまった。手紙や電報のやりとりだけはまだできたが、これも常に厳しくチェックされ、しばしば何日も遅れて届いた。1961年の秋までなら、糞尿にまみれることを厭わなければ、下水道の中を這って西に行けた。数か所ではあったが、1961年9月でも、周到に調整を図って、予め切断した鉄条網の隙間から、白昼、大量脱出することもできた。しかしそれも1961年9月にはもはや無理となった。境界を挟んで、心痛む光景が幾度も見られた——西の新婚夫婦は東側の両親に別れを告げる。脱出した父親が東側に残した妻や子供と何年也會えなくなる。婚約者や兄弟姉妹が、別れざるをえないケースなど。



歴史的跳躍 1961年8月15日、東独兵士コンラート・シューマンは、見張りの誰もいない瞬間をものにする。多くのカメラマンがこの瞬間を捉え、この脱出は分断のシンボルとなった。



最後のメッセージ 壁職人が、若い西ベルリン市民に、壁越しにメッセージを手渡している。もし見つかりでもしたら、厳しい尋問を受け、長期間にわたる禁固刑を覚悟しなければならなかった。



向こう側へのまなざし 西ベルリンの中年女性がふたり、壁の向こうにいる親戚の姿を見つけようとしている。



圍いを抜けて 東ドイツの人達はどこであれ封鎖網の隙間を見つけて脱出しようとした。老いても若きも、運び出せないものは何もかも捨てて自由を求めた。

全面撤去



遮るものない射界
東ベルリンのハイデルベルク通り75番地と76番地の建物を爆破する様子(80年代)。また、手前にはシュタージ(国家保安省)によるトンネル阻止牆が見える。これは地下からの脱出を阻止するために1963年に建設されたもので、1989年まで不断に改良が重ねられた。



死者の眠りも妨げて 地区境界沿いの古い墓地から脱出することができたため、極まで「移転」させられた。死者たちが「死の境界線」に場所を譲ったわけである。

遮るものない射界

脱

出を阻止するため、東独では境界線の東側に立入禁止区域を設けた。ベルリン以外の両ドイツ間の国境の東側では、1952年以降、ほとんど至るところで500メートル幅の空き地が作られた。住民は強制移住させられ、建物は取り壊された。当初の1万1000人にもよる人達の大量移住について、SED内部では「害虫駆除」というコードと呼ばれた。一方、ベルリン市内の地区境界では、広い空間を立入禁止にするのは不可能であった。ところによっては、東西ベルリンそれぞれの建物の間に狭い道路とその両脇の歩道があるだけで、間隔がせいぜい15メートルほどしかない場合もあった。9月までは、東ベルリン市民は、窓からロープを伝って降りたり、西ベルリン消防隊の救命用ジャンピングスーツに向かって飛び降りて脱出を図った。しかしその際、けがを負ったり、命を落としたりする者も少なくなかった。

1961年9月、東独国境警察は壁に沿った建物の住民の立ち退きに着手した。何千もの東ベルリン市民が住まいを捨てねばならなかった。何の予告もなしに引っ越しの車が建物の玄関に横付けされることも珍しくなかった。最初に実施されたのは、ヴェッティンク地区のベルナウアー通りと、トレプトウ地区のハルツァー通りであった。なぜなら、そこでは東独側の建物の外壁が区の境界、すなわち東西ベルリンの境界になっていたからである。1964年からは、国境警備隊が壁近くの建物を解体し、遮るものない「射界」を着々と作っていった。ベルナウアー通り沿いに残ったのは、1階部分の残骸と、壁に囲まれたドアだけであった。ハルツァー通り沿いでは、やがて、何列もの建物がすっかり取り除かれた。爆破されたのは住居だけではなく、教会すら爆破された。「境界近郊地域」における組織的な解体は、80年代まで続いた。



突然の明け渡し 境界に近い建物の住民が住まいを立ち去るまで、ほんの数時間しかないことも珍しくなかった。その際もちろん、厳しい見張りがあった。



象徴的事件 ベルナウアー通りの和解教会は、壁建設以来、立ち入りが禁止されていた。この教会は西ベルリンの教区民のものであったため、長い交渉が続けられたが、1985年初頭、東独国境警備隊はついに、この神の家を爆破した。



手作業での解体 ベルナウアー通りの路地奥の建物が、つるはしを使って解体されていた時期もあった。



最後のチャンス ひとりの女性がベルナウアー通りの住居の窓から這い出し、強制退去から逃れようとしている。最後には見事、西への跳躍を成功させた。

国境監視体制



むき出しの傷口
鉄条網と塔と監視塔。血
なまぐさい国境がドイツ
全土を貫く。70年代に
は、この障壁を乗り越え
るのはほとんど不可能と
なった。



死の自動装置 散弾発射地雷 SM-70は、西側では「自動銃撃装置」と呼ばれた。近づくと蜂の巣にするものであった。この装置の設置を推進したのが、エーリヒ・ホーネッカーである。

地雷と「スターリンの芝生」

SED(ドイツ社会主義統一党)指導部は、西ベルリンを囲む国境と、両ドイツ間の国境を、組織的に整備していった。十分に場所があるところでは、5キロメートルに及ぶ幅広い立入禁止地帯が設けられた。ここには特別な証明書がなければ立ち入ることができなかった。国境警備隊の青年団は、1961年秋以降、両ドイツ間の国境に沿って、130万個のソ連製対人地雷を敷設した。地雷は、足を吹き飛ばしはするが、犠牲者がすぐには命を落とさないように設計されていた。1970年になると、これに加えて、特殊な指向的散弾発射地雷 SM-70が、東独側から見て最後の障壁に、東向きに取り付けられた。これは近づくと蜂の巣にする「自動銃撃装置」で、秘密報告書では「国境を侵犯しようとする者は、SM-70で命を落とすか、重傷を負い障壁を越えられなくなる」とされている。両ドイツ間の国境では、440キロメートルにわたってこの自動殺人装置が6万個設置され、ほとんど通過不可能となった。SED国家は、このためだけに5000万マルク近くを費やした。このほか有刺鉄線や信号ケーブル、照明装置も設

置された。また、10センチの鉄釘のついた格子状のマット、いわゆる「スターリンの芝生」が、地面に敷かれた。国境警備隊ではこれを「平面バリケード」と呼んでいた。この「スターリンの芝生」が設置されたのは、川岸などの「逃亡危険地帯」で、分厚い靴を履いても、この格子状のマットの上を通り抜けることはできなかった。最初に壁が作られた1961年8月13日の1年後には、西ベルリンを囲む155キロメートルの境界に、長さ合わせて数千キロの鉄条網や、中空ブロックを積み上げた壁が配置され、脱出はほとんど不可能となった。10年後には、鉄条網はほとんどすべて、コンクリート製の強固なバリケードや、鋭いエキスパンダタル製の障壁に置き換えられた。さらに、両ドイツ間の国境は、その60パーセントに壕を掘ることで強化された。特別に訓練された犬を放した個所も200を越え、監視塔も250近く設置された。しかし西ベルリンとの境界には、ソ連の指示により、地雷原と自動銃撃装置は配置されなかった。



死の脅し 東独兵士が両ドイツ間の国境に敷設した地雷は総計300万個。何十人も命を落としたり、重傷を負ったりした。立て札には「止まれ! 国境」「生命の危険」などと記されている。



国境に隣接 国境に近い村々は、撤去されなかった場合、監視は特に厳しかった。写真は、テューリンゲン州のエシュヴェーグ近郊の両ドイツ間の国境近くの村落。



警戒中 番犬の世話をする東独国境警備隊員。誰もこの完全防備の国境を超えることができなかった。



卑劣な武器 国境に敷設されたソ連製地雷。最初には木製(上)、後にはプラスチック製(下)であった。

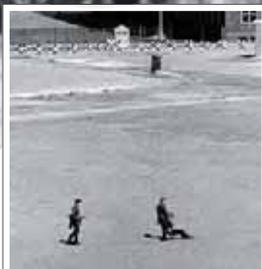
銃撃命令

傷を負う者、命を落とす者

許 可なく東独を逃れようとするれば、生命の危険が待ち受けていた。両ドイツ間の国境で落命した者は合わせておよそ1000名にのぼる。最初の犠牲者は1949年、国境が鉄条網で封鎖されて事実上通行不能になる3年前のことであった。ベルリンの壁の建設により、最後の抜け穴も塞がれた。しかし東ドイツの「普通の」人達は知らなかったことであるが、銃を構えた国境警備隊は最初、弾薬を持っていなかった。SEDは、西側保護国の反応が明らかになるまでは、事態がエスカレートすることを避けようとしていたのである。封鎖から9日後、ヴァルター・ウルブリヒトは、目論見通り、西側が何も企てないことを確信し、彼は政治局で「ドイツ帝国主義に与するドイツ人を、我々は撃つ。挑発をしかける者を撃つ」と宣言した。翌朝、国境警備隊の全ての隊員に、実弾が支給された。旧帝国議会

議事堂近くのフンボルトハーフェンで、24歳の仕立屋職人ギュンター・リトフィンが運輸警察に射殺されたのは、そのわずか2日後のことであった。以降、警備隊には銃撃命令が出された。単一の文書に基づく命令ではなく、これには様々な形態があった。例えば1961年9月14日付の国境警備隊への指示には「西ドイツへ逃亡して拘束を逃れようとする者は、一回の威嚇射撃の後、銃撃してよい」とあった。その後、SED政治局の軍事司令部では、「裏切り者と国境侵犯者には銃を向ける」ことが決定される。そして、ウルブリヒトの後を継いでSEDの指導者となったエーリヒ・ホーネッカーは、1974年3月3日、「従来と変わらず、国境侵犯の企てに対しては、ためらいなく銃を使用しなければならぬ」と明確に規定した。銃撃命令は、1989年4月上旬まで有効であった。しかし命令の撤回は極秘扱いとされ、この秘密は厳しく守られた。

万人の目の前で
1962年8月17日、18歳の建設労働者ヘーター・フェヒターが壁を越えようとして銃撃を受けた。彼は1時間のあいだ、壁の真下に横たわっていた。それからようやく、国境警備隊が彼を病院に運んだ。しかし病院では死亡を確認できただけであった。



重傷を負って 1971年9月5日、ベルント・ゾーフエルトは脱出を試み、国境警備隊に銃撃された。命は落とさなかったものの、後遺症を負った。



果たされなかった救助 1972年10月30日、8歳のジェンガヴェル・カトランジュは、遊んでいてシュプレー川に落ちた。西ベルリンの市民は、溺れる少年を助けることができなかった。川が境界をなしていたからである。



事実上の処刑 1966年2月8日、ヴィリー・フロックは鉄条網にひっかかってしまった。彼はふりほどこうとしたが、国境警備隊は、丸腰の彼に銃弾を浴びせた。



撃殺されて 1962年9月4日、脱出を試みたエルンスト・ムントの遺体を運ぶ東独国境警備隊。

小ベルリン

国境障壁の強化
西独国境警備隊の隊員
がふたり(左)、東独兵士
がメドラロイト村の真ん
中に新しい障壁を作る
のを見ている。ロープの
張ってあるところが本来
の境界線。



悪化した状況 境界線は、タンパツハ川の南を通過してメドラロイト村を貫いていた。最初の障壁(右)は川の南の岸にあった。その後、東独国境警備隊は、北の岸に新しい壁を築いた。そのためには、ぬかるみにつきりながら作業しなければならなかった。

観光名所 奇妙な状況は、たくさんの西側観光客をこの分断された村に引き寄せた。観光客の数は、6月17日には特に多かった。



村の中の壁 70年代になると、メドラロイト村の障壁はベルリンの壁とそっくりになった。この村が小ベルリンと呼ばれた所以である。



日常 店先に集まる村人たち。前方には西側のステータスシンボル、メルセデスがある。背景にはいつも壁が見える。

チューリングゲンのメドラロイト村

ドイツに駐留する米軍兵士は、オーバーフランケン地方にある人口50人のこの村を「リトル・ベルリン」と呼んだ。首都ベルリンで大規模に展開されていたことと同様に、この小さな村での出来事も小規模ながらドイツ分断のシンボルとなる。この小さな村の真ん中を、両ドイツ間の国境が通っていたのである。タンパツハ川のほとりのメドラロイト村は、何百年も前から境界の村であった。一部はチューリングゲンに、一部はバイエルンに属していた。しかしだからと言って、長い間に影響はなかった。人々は他の村と同じように暮らしていた。村にあったのは、ひとつの小学校、ひとつの宿屋、ひとつの男声合唱団であった。日曜日には、牧師のいる隣村テーベンの教会に村民たちは通った。第2次世界大戦後、チューリングゲンがソ連、バイエルンがアメリカの占領下に入っても、通行証が不要になった以外、最初はなにも変わらなかった。ドイツ連邦共和国(西ドイツ)とドイツ民主共和国(東ドイツ)建国後も、メドラロイト村では国境を通ることができた。しかし1952年、全てが変わった。SED(ドイツ社会主義統一党)政府は境界線の封鎖にとりかかったからである。村は「防衛ライン」上に位置することになり、西ドイツの人達はこのラインを越えることは一切できなかった。東ドイツの人達も、立ち入ることができたのは特別な許可を得たものだけであった。東ドイツ側の村民のうち、政治的に信用できないとみなされた者は強制移住させられた。メドラロイト村を通る両ドイツ間の国境では、次第に障壁が拡充され、越えがたいものとなっていった。60年代にはまだ板塀であったが、やがてベルリンと似た高さ3メートル40センチのコンクリートの壁が築かれた。壁には、障壁としてのみならず、日隠しとしての役割もあった。東から西へは、挨拶をしたり、手を振ったりすることすら禁じられていたからである。37年後、ついにメドラロイト村でも壁による分断は終焉した。人々の喜びは、「小ベルリン」でも、首都と同じく大きかった。



銃弾に撃ちぬかれ
マンフレート・マセンテは、
幾人かの友人と共にバス
に装甲を施し、1963年5月
12日、ベルリンのインヴァ
リーデ通りの国境検問所
の遮断棒を突破しようと試
みた。しかし突破寸前で運
転手が撃たれ、ハンドルが
壊れた。待っていたのは、長
期にわたる禁固刑であった。



地下トンネル ブレーノ・ベッカーは、壁の下にトンネルを掘ることを考えた
最初のベルリン市民のひとりである。1962年1月30日、彼の家族をはじめ
28人が、脱出のチャンスをもにした。



思わぬ利用法 国境を突破するには、ブルドーザーはうってつけであった。柵
も壊もこれを阻止できないことを、1963年10月18日、ある東独兵士が証明
してみせた。

決死の覚悟で

SED(ドイツ社会主義統一党)指導部は、基本的人権を無視して、国民に西への出国を認めなかった。移住のために出国を申請してもたいてい拒否され、その後、職業上の不利や、シュタージ(国家保安省)による迫害が待ち受けていた。多くの人々にとって、残された手段は脱出のみであった。政治的迫害、経済的な行き詰まりなど、脱出の理由は多種多様で、家族との再会もそのひとつであった。脱出のルートも様々であった。彼らは、重量のある車両で直接、国境の遮断棒を突破しようとしたり、苦勞を重ねてトンネルを掘ったり、気球や飛行機など空路を使ったりした。また、ゴムボートやサーフボードで、あるいは泳いで、バルト海を渡った人達もいた。偽造バスポートを使って隣接する社会主義国経由で脱出したり、トラックルームに入って国境を通り抜ける人もいた。しかし「共和国逃亡者」の多くは、シュタージの隠語に言う「非帰還者」、つまり西を訪問したまま帰国しなかった人々であった。脱出には、多くの危険が伴った。成



ゴムボートに乗って自由へ 1971年8月20日、デートレフ・レンクは、木の板を櫂にしてバルト海に向かって出発し、36時間後に救出された。

功例よりも、失敗例の方がはるかに多かった。命を落とした者も少なくない。クリス・ゲフロイは、1989年2月、脱出を試みて射殺された。ウィンフリート・フロイデンベルクは、1989年3月、手製の気球に乗り込んで墜落した。彼らはドイツからドイツへの途上で命を落とした最後の人達であった。



西への風を受け 1979年9月、4人家族が2組、手製の熱気球で両ドイツ間の越境に成功。



道なき野を横切って この偵察用戦車に乗って、1963年6月28日、3人の
国家人民軍兵士が国境のバリケードを破って西のヘッセン州に逃れた。



脱出機 1962年5月12日、ある技術者が厳しい監視をくぐり抜けて、「スポーツ技術協会」の飛行機を盗んだ。離陸後、死の境界線を越えて西のオーバーフランケン地方のゲーディツに着陸。

人身取引

非人道的
ハウゼン第1監獄に収容された政治犯は、壁に囲まれた狭い中庭で「自由行動時間」を過ごさなければならなかった。この監獄に収容されていたのは、主として脱出に失敗した「共和国逃亡者」であった。

高額で解放される政治犯

壁 が建設されてから崩壊するまでの間、東独では、25万以上の男女が政治的理由により拘束された。脱出に失敗した「共和国逃亡者」や脱出に手を貸した者、反体制派あるいはその濡れ衣を着させられた者に、長期の禁固刑が宣告された。しかし、彼らの長い間陰で囁かれていた事だが、彼らは金銭や物資と引き換えに西ドイツに引き渡されたのである。この「人身取引」は、アデナウアー時代終焉の1962年に始まった。この時の全ドイツ問題担当相はライナー・バルツェルであった。東側との連絡にあたっては、ドイツ福音教会が重要な役割を果たした。東側では弁護士のヴォルフガング・フォーゲルが窓口となつて、

双方が粘り強く交渉を行い、1962年のクリスマスに、最初の解放について合意にいたった。解放されたのは、20人の政治犯と、20人の子供。その代価は、鉄道貨車3両分の肥料であった。しかし東独はすぐに要求をつり上げた。当初4万マルクであった政治犯1人あたりの代価は、80年代には10万マルク近くになった。金額の根拠は、東独における教育費である。西独側は、多くの場合、これを物資の引渡しで相殺した。問題となったのは、どの政治犯を解放するかであった。東独側では、SED総書記のホーネッカーまたは国家保安大臣エーリヒ・ミールケが、多くの場合、個人的に決定していたが、西独では、両ドイツ関係担当の連邦大臣が管轄していた。担当の事務次官ルート

ヴィヒ・レーリンガーは、後に次のように文書で述懐している。「関係者や支援組織を通して、私たちは多くの名前とその運命を知っていた。しかし東独がほんのわずかの政治犯しか解放しようしないことは、常に明白であった。そのため、特に誰の解放を要求するかが重要となった。これは非常に心の痛む仕事であった。」1989年までに、ハウゼン、ホーエンエック、その他の悪名高い東独の監獄から解放された者は3万3755名にのぼる。



金と引き換えで得られる自由。反抗的な囚人は、ハウゼンでは情け容赦なく弾圧された。弁護士ヴォルフガング・フォーゲルにとって、西との交渉はおいしい商売であった。金で解放された囚人は、自立たない外観のバスに乗って、西に移送された。



グリーニッカー橋におけるスパイ交換

グリーニッカー橋は、冷戦のシンボルの中でもとりわけ名高いもののひとつである。ハーフェル川にかかってベルリンとポツダムを結ぶこの鉄橋の上で、3度にわたり、合わせて38名のスパイが交換された。その中には、ソ連の原子力スパイ、ルドルフ・アベルや、ソ連上空で撃墜されたU-2パイロット、ゲーリー・パワース、それに市民運動家のナタン・シャランスキーがいる。東独で「統一の橋」と呼ばれたグリーニッカー橋ではあるが、私的な通行が一切禁止されていたため、伝説ともなった。1953年以降、この橋を渡ったのは、4連合国の軍事顧問団の乗った自動車のみであった。今日では、ポツダム側のヴィラ・シェーニンゲンに小さな博物館があり、当時の様子を伝えている。

キーがある。東独で「統一の橋」と呼ばれたグリーニッカー橋ではあるが、私的な通行が一切禁止されていたため、伝説ともなった。1953年以降、この橋を渡ったのは、4連合国の軍事顧問団の乗った自動車のみであった。今日では、ポツダム側のヴィラ・シェーニンゲンに小さな博物館があり、当時の様子を伝えている。



初回 1962年2月10日、この橋を介して、スパイ、ルドルフ・アベルと、撃墜されたU-2パイロット、ゲーリー・パワースが交換された。



最後のスパイ交換となった冬 1986年2月11日の3回目の交換が、グリーニッカー橋を介した最後の交換となった。東側は、高名な市民運動家ナタン・シャランスキーを解放した。

Abgang zur Einreise in die Hauptstadt der DDR



雑踏
東ベルリンの「フリードリヒ通り」駅で「東ドイツ首都」に入国する西ベルリン市民

「常態化」



林立するアンテナ 公けにはタワー、それでも東でだれもが見ていたもの。唯一、俗に「無知の谷」と呼ばれたドレスデン周辺地域では受信できなかった。



連合国側のチェックポイント 70年代初頭、ヘルムシュテット＝マリエンボルン検問所にはイギリス人が詰っていた。ここまでがイギリス占領地域であった。



試される忍耐力 両ドイツ間の国境に位置するヘルムシュテット＝マリエンボルンのアウトバーン検問所。主な旅行シーズンには、何キロにも渡って渋滞した。

規定された二国併存

70年代、ドイツ問題は重要性を失ったかのように見えた。世界は、そして次第に多くの西ドイツの人達も、ドイツの分断に慣れてしまい、「常態化」という言葉が使われるようになった。その要因は、西独と東独との関係を初めて規定する一連の条約で、その最終章とも言えるのが、1972年12月に締結された基本条約であった。この基本条約には双方が「内政、外交において、両国それぞれの独立性を尊重する」と記されている。この現状追認によって、西独は、基本法で要請された再統一や、全ドイツ人に及ぶ公民権を諦めたわけではなかった。それでも、基本条約は、西独の単独代表権の要求を終焉させるものであった。東独はただちに全世界で承認され、1973年、国際連合は両ドイツ国家を同時に受け入れた。両ドイツ国家間の関係について、西ドイツ政府が取った政策は小さな歩みを着実に実行しているというもので、分断の影響を和ら

げ、東ドイツ市民の生活状況を改善し、こうして国民の結束を固めようとした。1973年には、西から東ベルリンと東ドイツに入国した旅行者は350万人以上を数え、1970年の3倍になった。逆方向にも、初めて改善が見られた。「切実な家庭の事情」により、年金受給前の4万人の東ドイツ市民に、西への訪問が認められた。両ドイツ間の電話による通話数も、1970年にはまだ年間100万件を大幅に下回っていたが、1980年には2300万件を越えるまでに爆発的に増加した。しかしSED（ドイツ社会主義統一党）指導部は、イデオロギー的な断絶政策を一貫して追求していた。とりわけ、西側テレビの影響が増大していたのである。70年代半ば以降、西独の通信員が東ベルリンに入ることが認められたが、彼らは厳しい監視下に置かれた。



観光の目玉 再建された帝国時代の建造物が並ぶ東ベルリンの大通りウンター・デン・リンデン。ここはSED国家の表看板であった。



感動の再会 東西に分断を余儀なくされたふたりの女性がベルリンの検問所で再会。



いつもの光景 東ベルリンに到着した西ベルリン市民。検問を終え、数少ないタクシーを拾おうと長い列に並ぶ。

一見、正常
3人の観光客が、東側から
ブランデンブルク門を眺め
ている(合成写真)。かつて
バリ広場は全面的に立入
禁止区域になっていた。東
ドイツの人達がここから西
ベルリンに脱出することは
不可能であった。



壁を巡る日常



路地 ベルリン＝クロイツベルクのベタニエンダムでは、壁と西ベルリンの建物との隙間に4メートルにも満たなかった。



壁に囲まれ 西ベルリンのオラニエンブルクの飛び地。「カモのくちばし」と呼ばれた。東独国境警備隊は、封鎖を順次完璧に仕上げた。

境界線の影の中で

国 境封鎖施設は、国境警備隊が目隠しを立てたり、立入禁止区域を設けたりして、東側からは出来る限り見えないようになっていた。西ベルリンの側ではそうではなかった。西ベルリンでは、壁が生活の中に入り込んでいた。スプレーで落書きをする者にとって、壁は巨大なキャンバスであった。キャンプ好きにとって、壁の近くは週末を過ごす静かな場所となった。クロイツベルクの料理屋は、ここに即席のピヤガーデンを設けた。まるで壁などどこにもないかのようであった。やがて、百万都市の真ん中を走る、命を脅かす危険な境界線に対して、住民よりも観光客が関心を示すようになる。時折、またしても銃撃が起こったときだけ、死の境界線は一般の意識にのぼった。本格的な封鎖施設は、どこでも、境界線から東側地域に数メートル入ったところに設置されていたため、ベルリンの中央に、西の法が及ばず、従って西ベルリンの警察が

立ち入ることのできないエリアができるようになった。このエリアには違法建築が数多く建てられ、1990年まで存続。統一後、一部合法化され現存しているものもある。壁の影の下で育った西ベルリンの子供たちは、「警官と泥棒」のかわりに、「国境警備隊と脱出者」で鬼ごっこをした。時には現実をリアルに真似て、「脱出者」が規則的に「射殺」されることもあった。子供たちは非人間性を無意識のうちに消化していた。これに対し、大人たちの場合はたいてい、そうはいかなかった。現実への適応は見かけの上だけで、実際のところは、多くの者が精神科や神経科の医者言う「壁病」に苦しんでいた。これは心身障害の症候群であり、しばしば抑鬱症状や、「壁に囲まれている」という閉塞感を伴っていた。壁建設後の西ベルリンは、世界で最も自殺率の高い都市であった。しかし東ベルリンの自殺と自殺未遂の数は、さらに多かった。



偽りのどかさ ベルリン＝クロイツベルクの壁沿いで日を浴びる5人の西ベルリン市民。壁に囲まれた町の住人は、たいてい、いつもそこにある境界と、やがては折り合いをつけるようになっていた。



余暇のオアシス 多くの西ベルリン市民はやがて、壁のすぐ近くで静けさと自然を味わうことを知る。壁の手前には、まだ、最初に築かれた柵が見える。

挑発的ジョーク プラスチックの島を浮かべて、テルトウ運河を下る西ベルリン市民。これを東独国境警備隊が、監視塔から厳しく見張る。



生理現象 国境警備隊の歩哨も、用を足さねばならぬ。歩哨隊長が装甲車のストッパーへ立ち小便している場面を、ある東独兵士がこっそり写真に撮っていた。



もう止められない
1989年10月9日、ライプツィヒで7万人がSEDに対してデモをおこなった。警察やシュタージは、大群衆を前に、何もできなかった。以後、自由を求める運動が、政府を追い詰めていった。



新たな希望 オーストリア外相アロイス・モックと、ハンガリー外相ジュラ・ホルンは、1989年6月27日、国境の有刺鉄線を切断。鉄のカーテンは、ますます綻びていった。



好機 1989年8月19日、オーストリアとの国境に位置するハンガリーのショブロンで開催された「汎ヨーロッパ・ピクニック」で、400名の東ドイツ市民がテレビカメラの前で脱出に成功。



救いの言葉 1989年9月30日、当時の西ドイツ外相ハンス＝ディートリヒ・ゲンシャーは、ブラインの西ドイツ大使館のバルコニーから、何千もの東独を脱出しようとする人達に対し、西ドイツへの出国が許可されたことを発表。

われわれこそが国民だ!

三 ハイル・ゴルバチョフの改革政策が世界を変えた。西では軍拡競争終焉への、東では民主化への希望が芽生える。しかしSED(ドイツ社会主義統一党)は、グラスノスチ(情報公開)やペレストロイカ(改革)を気に留めることはなかった。経済不振の東独では沈滞ムードが漂っていた。1989年5月には、実施されたばかりの地方選挙の不正が、反政府勢力によって暴露されたが、国家指導部は黙殺と弾圧でこれに応えた。出国申請の数は増えた。夏には、何千もの東ドイツの人達がもう帰って来ない決意を固めて、休暇に出た。行先はハンガリー。ハンガリーではオーストリアとの国境で鉄のカーテンに綻びが生じていたからである。またブラハとワルシャワの西ドイツ大使館にも、東ドイツの人達が殺到した。彼らの西への出国が許され、党指導部が動揺する



公然たる抵抗 市民運動家たちは、教会で抗議活動を展開して、抵抗運動を無視しようとする東独指導部の裏をかいた。西側メディアのニュースも、これに追い打ちをかけた。



象徴的写真 ミハイル・ゴルバチョフとエーリヒ・ホーネッカーは、東独建国40周年記念式典で意見をかわした。「遅れて来る者は、人生に罰せられる」という言葉は、時代のモットーとなった。



抜け穴ブラハ 何千もの東ドイツ市民が西ドイツ大使館に逃げ込んだ。チェコの警官も彼らを押しとどめることはできなかった。



間接的な支援 1989年、SED政府は、もはややっかいな批判者を「消してしまおう」とはできなかった。多くの抗議活動に、西側カメラマンが同行していたからである。

壁の崩壊

運命の時
憎い壁が、ついに落ちた。何
千もの人々が壁によじ登り、
ブランデンブルク門で世紀の
出来事を祝った。ベルリン中
が興奮に酔いしれた。



1989年11月9日

正 確に18時53分のことであった。SED（ドイツ社会主義統一党）政治局員ギュンター・シャボウスキーが東ベルリンの国際プレスセンターで、「東独国家指導部は、今日、いかなる東独市民も出国が可能であるとする規則を定めた」と発表した。あるジャーナリストが、新しい旅行規則はいつ発効するのかと尋ねると、シャボウスキーは手元の紙を繰り、「即時。遅滞なくです」と答えた。これは彼の思い違いであったがこの発言が雪崩を引き起こした。西側の報道通信社がこの思いがけないニュースを伝えるや否や、数えきれないほどの東ベルリンの人々が、検問所に向かう。21時頃になると、ポルンホルム通りはトラバントやヴァルトブルクでいっぱいになった。人々は声をあげて国境を開くことを要求した。しかし東独の担当将校は指示を受けていなかった。

ポンの西独議会では、議員たちが席から立ち上がって「ドイツの歌」（国歌）を歌い始めた。「統一と正義と自由」を歌い終わろうとする、ちょうどその時、東ベルリンのポルンホルム通りで東ベルリン市民に初めて西への通行が許された。やがて次第に、チェックポイント・チャーリーなど、他の検問所も開かれていった。ホーネッカーの後継者エゴン・クレンツは後に、圧力があまりにも大きかったと回顧している。ベルリンはたちまち興奮の渦つぽとなった。町の東からも西からも、何十万もの人々が、各地のチェックポイントや、西の目抜き通りクーダムや、分断の象徴であったブランデンブルク門に集まった。28年の歳月を経てついに、壁が崩壊したのである。1年後、東独はもはや存在していなかった。ドイツは、平和と自由のうちに、再び統一されたのである。



記者会見 新しい旅行規則はいつ発効するのかという問いに対し、ギュンター・シャボウスキーは誤って「即時。遅滞なくです」と答えた。



熱狂 ポルンホルム通りの検問所で、パーゼ橋を越えて西ベルリンへの道を行くトラバントやヴァルトブルク。ここでも群衆は興奮に包まれていた。



遮断棒が上がった どんなに速く走っても速すぎることはない。幸福感に包まれた東ベルリンの人々が、ポルンホルム通りの検問所を抜けて、町の西側へ走って行く。



大はしゃぎ 若い女性がふたり、感激をほとぼらしせる。



歓迎 何千もの西ベルリン市民も町に出て、東ドイツの人々を迎え、彼らと共に祝った。



壁を叩いて破片を持ち去ろうする人 こんな狼藉も、この夜は誰も咎めなかった。

追憶
ベルナウアー通りには、ベルリンの壁に関する重要なベルリンの壁記念センターがある。毎年、何十万もの人々がここを訪れて、当時の非人道的な国境を巡る体制について見聞を深めている。



刑事訴追と追憶

東独が犯した不正は、基本的に、東独の刑法に従って処罰しなければならない。いわゆる遡及効の禁止は、法治国家の原則の中でも、とりわけ重要なものだからである。しかし、両ドイツ間の国境で殺人を犯した者たちを、再統一したドイツの司法はどうやって罰することができるであろうか？彼らは東ドイツの法に違反したわけではなく、明白な命令に従ったにすぎない。それでも犯人に責任をとらせるため、連邦通常裁判所は、法学者グスタフ・ラートブルッフの原則を援用した。これによれば、人権に根本的に反する場合、成文法は無効である。そして、生命の暴力の抹殺は、最も悪しき人権侵害な

のである。こうして、両ドイツ間の国境における射殺事件に関し、2000件を超える捜査が行われた。法的な処罰を受けた者はおよそ300名にのぼる。しかしそのうち、実際に監獄に入ったのは、30名に過ぎない。このほか、東独の不正に関して告発を受けた者が10名、懲役刑に処せられている。この中には、党和国家指導部の一員として、壁における銃撃に係わったエゴン・クレンツ、ハインツ・ケスラー、ギュンター・シャボウスキーもいる。重い責任を負うべきものの多く、例えば、SED（ドイツ社会主義統一党）党首エーリヒ・ホーネッカーや、シュタージ（国家保安省）大臣エーリヒ・ミールケに対しては、国境での殺害に関する訴追は停

止されている。なぜなら、これらの被告たちには、法治国家の基準に照らして、公判にて審理される能力がなかったからである。旧東独の不正の法的検証は、2005年に終了した。狭義の法的定義に従えば、殺人を除くすべての犯罪行為が時効を迎えることになる。SEDの不正に対する司法の取り組みに対して、東独の市民運動家ベアベル・ボーライは、「わたしたちは正義を欲したが、手に入れたのは法治国家だった」と、冷めたコメントをしている。こうした批判は正当であるが、刑事訴訟手続きが旧東独の不正の解明に重要な役割を果たしたことも確かである。旧東独という不正国家に対する

学問的な研究は、依然、終わっていないし、人々が馳せる当時への想いも失せてはいない。また多くの施設、たとえばベルナウアー通りのベルリンの壁記念館や、ヘルムシュテット近郊マリーエンホルンの検問所跡地のドイツ分断記念館、メドラロイトの「ふたつのドイツ」博物館、さらにはかつての両ドイツ間の国境やベルリンにあるその他多くの大小の記念館や博物館は、SEDの非人道的な国境政策とその犠牲者を記憶し、歴史教育・政治教育を行うという使命を担っている。



時代錯誤 エーリヒ・ホーネッカーは、裁判中に、共産党風の挨拶をしてみせた。裁判所は、彼に対する訴訟手続きを、健康上の理由により停止した。



悔悟 SEDのベルリン支部長ギュンター・シャボウスキー（右）は、ベルリンの壁で殺された者に対する責任を認めた。同時に告発されていたエゴン・クレンツ（左）は認めなかった。



頑迷 恐怖の東独諜報・テロ機関であった国家保安省の長、エーリヒ・ミールケが裁きを受ける。彼はワイマール共和国時代にすでに殺人を犯していた。



痛み ベルリン＝トレプトウのブリッツァー運河で、射殺された息子クリスの慰霊碑の前にうずくまるカール＝ゲフロイ。



いつまでも忘れない 壁の犠牲者の名を記した記念の十字架。彼らはベルリンの旧帝国議会議事堂のすぐ近くで命を落とした。



遺物 マリーエンホルンの旧検問所の監視塔。今日では、その検問所跡地にドイツ分断記念館が作られている。

記憶

独裁は二度と許さない!

1959年、アクセル・シュプリンガーは、西ベルリンのソ連地区との境界のすぐそばに、出版社の社屋を構えました。彼は夢想家であり、不自然なドイツの分断は歴史の前に存続し得ない、と固く信じて疑いませんでした。2年後、建築部隊が出版社の敷地の縁に直接、壁を築いた時も、彼はそこにとどまりました。アクセル・シュプリンガーと、社の編集者たちは、その後長年にわたってドイツ統一のために働きました。彼らの信念は正しかったのです——28年の時を経て、平和革命の流れの中で、壁は崩れたのです。これも、今ではもう、一世代前の出来事となりました。分断がいかにも苦しみをもたらしたか、これがいかにも克服され、あの記念すべき1989年11月、壁の崩壊が人々にいかなる喜びを授けたか——これらは次第に、国民の意識から薄れつつあります。

これを食い止めることが、『ビルト』『ヴェルト』両紙の出版社であるアクセル・シュプリンガー出版社の願いです。同じ関心を抱いているのが、共産主義独裁体制、ドイツとヨーロッパの分断、そしてその克服の歴史とその帰結に取り組む「ドイツ社会主義統一党による独裁体制を検証するための連邦基金」です。この基金は1998年、連邦議会によって創設されたもので、以来、3100万ユーロの資金を得て、連邦全土でおよそ2200のプロジェクトを推進し、SED独裁の解明に重要な貢献を果たしてきました。

「壁——ドイツをつらく囲む」展は、連邦検証基金と『ビルト』、『ヴェルト』両紙が、独裁は二度と許さない!という共通の目標を担うパートナーとして協力関係を築き、開催するものです。

編集

編集: Bundesstiftung zur Aufarbeitung der SED-Diktatur, BILD, Die Welt
写真調査、テキスト製作: Dr. Ralf Georg Reuth (BILD), Sven Felix Kellerhoff (Die Welt)
プロジェクトマネジメント: Dr. Ulrich Mählert (Bundesstiftung Aufarbeitung)
展示構成: Barbara Boettcher-Hillen (BILD)
同実施: Thomas Klemm (Agentur für Gestaltung und Realisierung, Leipzig)
写真出典 (別段の表示のない限り): ullstein bild, Fotoarchiv von BILD
グラフィック構成: Jim Dick
写真選定: Monika Gehrman, Tanja Belli
同協力: BILD-Foto-Redaktion
翻訳: 飛鳥井雅友
教材用の関連資料は以下のサイトから無償で入手できます
www.stiftung-aufarbeitung.de/DieMauer

BUNDESTITFTUNG AUFARBEITUNG  **BILD** DIE WELT

ベルリンの壁と両ドイツに関する文献



参考インターネットサイト

www.stiftung-aufarbeitung.de
www.politische-bildung.de
www.berlin.de/mauer

www.bpb.de
www.bstui.de
<http://1961.dra.de>

www.stiftung-berliner-mauer.de
www.mauer-museum.de
www.grenzlandmuseum.de/museen

ドイツの分断とSED独裁の歴史に対する証言については、以下のポータルサイトを参照:
www.zeitzeugenbuero.de

ベルリンの壁とSED国境政策に関するさまざまな記事・写真・記録は、以下のサイトの最新ニュースとオンラインアーカイブを参照:
www.bild.de 及び www.welt.de